

「ID（インテリジェント・デザイン）理論をめぐる 学際シンポジウム」の開催に当たりて

国際地球環境大学名誉総長

総務大臣所管・日本ヘブライ友好親善協会理事長

NPO法人・新エネルギーシステム開発普及研究所理事長

農学博士 小 牧 久 時

前回の本学学際シンポジウムでは、落合正浩博士（国際地球環境大学教授、公衆衛生学部長、医学博士）をお招きして、「名の起源」をテーマとして採り上げました。それは「万有の究極の起源」に至るためのものでありました。

今回の「ID理論およびその周辺領域に関する学際シンポジウム」（ID理論をめぐる学際シンポジウム）では、その「万有の究極の起源」（The Origin or the Ultimate Cause of the Whole Universe, of all dimensions）が「宇宙のデザイナー」ともいうべき究極の実在であるのか、そうではないのか、という究極の課題に別の角度からせまることと致します。

すなわち、ID理論について御造詣の深い京都大学名誉教授・渡辺久義博士をお招きして、先ず、ID理論の概要（<http://www.dcsociety.org>にて、おおよそのことを知ることができます）について約1時間ほどの御講義を拝聴し、そののち、主催者（国際地球環境大学）を代表して、創立者名誉総長・小牧久時より、ID理論そのものではなく、その周縁領域（隣接領域）（学際領域）における幾つかの重要テーマについての提言（いわば、「宿題報告」のお願い）を申し上げ、数名の大先生方からの御意見を承る、ということであります。（「宿題報告」の成果については、次回以後の「学際シンポジウム」にゆずります。あるいは「本学学術論文集」の次号以後の誌面を御提供させて頂くのも、ひとつの方法かと想います。）

京都大学名誉教授・渡辺久義博士が御指摘のとおり、ID理論がめざしているのは「科学のパラダイムの変換」であって、「科学と宗教の間の論争」ではなく、ましてや「宗教間の論争」ではありません。

物理学、化学、生物学などの自然科学の常法に従って、自然現象（検証可能なる）を研究の結果、得られたる現在の発展段階における科学的研究の成果（宇宙の真理そのものの万分の一にも当たらないであらうが）だけに依るとしても、宇宙にはそのデザイナー（意志、意図ある「仕組み元」）があることを認めざるを得ない（あるいは、非常に非常に強く推測せられる）という指摘にすぎません。その非常に強力なる推測（否定のしようのない、非常に強力なる推定）に基づいて、科学のパラダイムの変換を求めているにすぎません。

この結論は、万人にとっての（すくなくとも、科学者あるいは「科学を尊重する人間」であることを自負している人々にとっての）コンセンサスであるべきはずだと想うのですが、現実には未だそうっておりません。京都大学名誉教授・渡辺久義博士が、ID理論の研究そのものとともに、その啓蒙活動にも力をそそがれて、そのための学会（創造デザイン学会<http://www.dcsociety.org>）を創立なさらなければならなかった理由がそこにあります。

すなわち、今の時点では、米国などの諸外国においても日本においても、何とかしてID理論の足をすくおうとする“外敵”にとり囲まれています。甚だしきは“キリスト教の右派”(いわゆるファンダメンタリストとかクリエーションистとか呼ばれている)の活動のひとつであると誤解されたりもしています。そのような事情の中で、ID理論は、“外敵”に対して、身がまえざるをえず、宗教との関係の無いことを、神経質なまでに強調せざるを得ないのでしょう。(ID理論は、あくまでも「科学のパラダイム変換」を目ざすものでありますから、当然のことでもあります。)

でも、われわれ(とくに、小生)はI.D.理論の研究者ではありませんので、もっと自由に、のびのびと、ID理論の隣接領域(境界領域;学際領域)に関して語ることも出来ます。

さて、それゆえ、ここで、ID理論そのものではなく、その「隣接領域」(境界領域;学際領域)について、よりいっそう自由に発言しうる立場に立って、少々、次回のための「宿題」提出に関する御提言を申し上げてみたいと思います。

まず、「宗教」とのかかわりです。ID理論の首唱者たちは、「ID理論は、科学のパラダイム変換であって、宗教とは無関係……」であることを、ことさらに、強調しなければなりません。その事情は、良く良くわかるのですが、「諸宗教の側」からのID理論への御評価(ご期待)乃至、「感謝の表明」は、もちろん、自由であります。

ひとつの「宿題」として、「宗教」の側の学究(カトリック神学者を例にとりていえば、九州大学名誉教授・稲垣良典博士、南山大学名誉教授・青山玄博士、京都大学名誉教授・山田晶博士、京都大学名誉教授・坂本慶一博士、上智大学教授・雨宮慧博士など;プロテスタント神学者を例にとりていえば、日本キリスト教協議会宗教研究所長・同志社大学名誉教授・幸日出男博士、佛教学者を例にとりていえば、妙法蓮華宗管長・玉井日禮上人、法華宗第96世管長・林日圓上人、等)が、ID理論をどのように御評価(あるいは御期待、あるいは、御注文、御要望)されているのかをぜひ、次回までに承り度いと思います。

次に「宗教」(ここでは、キリスト神学を例にとります)の上での「論争」のうちのあるものは、ID理論そのものの一そうの充実のためにも非常に重要であるということです。これは、科学実験、科学的検証の可能な課題です。

すなわち、ここでの「宿題」は、近年、明らかにされた(あるいは、明らかにされつつある)人類のDNAの特異性に関する研究成果に関する議論あるいは研究の続行であります。

ここでは、小生の主観あるいは「思いちがい」の混入することを避けるために、小冊子「あなたのことを気づかう創造者がおられますか」(ものみの塔聖書冊子協会、刊、1998) (Is There a Creator Who Cares about You ?, Watch Tower Bible and Tract Society of Pennsylvania, ©1998) の一節を、原典を明示してそのまゝ、御引用させて頂くことにしましょう。

『近年、科学者たちは人間の遺伝子を大いに研究してきました。人間の遺伝の型を世界的規模で比較することによって明らかにされてきたのは、すべての人間に共通の先祖がいるという点です。かつて生存した人々、そしてわたしたち一人一人も含めて、すべての人間のDNAの起源は一つなのです。1988年、ニューズウィーク誌(英語)は、こうした発見を、「アダムとイブを捜す」(邦題:「新説『人類誕生』」)という記事で伝えました。その研究は、女性を通してのみ伝達される遺伝物質であるミトコンドリアDNAの一つのタイプについて行われたものでした。男性のDNAについてなされた研究に関する1995年の報告も、同様の結論を示していました。タイム誌(英語)

の言い方で述べれば、「祖先となる『アダム』がいた。その[Y]染色体上の遺伝物質は、今日地球上に存在するすべての男性に共通」なのです。』

(「あなたのことを気づかう創造者がおられますか」ものみの塔聖書冊子協会、刊、98頁)

小生が本日、御提出する「宿題」は、次回の学際シンポジウムまでに、上記の報文の原典を手して、ぜひ、詳細にわたり解説して頂き度い、ということです。もしも、反論(とくに、唯物論哲学者の側からの)(あるいは、科学者の側からの)があるなら、その反論(さらには、反論に対する反論)をもぜひご紹介、ご解説をお願いし度い、次第なのです。

「最初の一組みの人間の夫妻」(いわゆる「人祖」)と「天使長」のあいだでおこった「共犯」(すなわち「原罪」)からの回復(復帰摂理)ということこそが、キリスト神学(カトリック神学であろうと、プロテスタント神学であろうと、エホバの証人の神学であろうと、統一神学であろうと)の最大の課題でありますので、上記の研究は非常に重要であります。その上、この研究は「ID理論」の側にとっても、非常に有力なる支持になると思う次第です。

ひと言つけ加えて申し上げますと、世の中には、一智半解の人々が沢山おられて、「ものみの塔聖書冊子協会」を「キリスト教の右派」(ファンダメンタリストとかクリエーションистとかいわれる)のひとつと、かんちがいしている人々が沢山おられます。そうではありません。

「あなたのことを気づかう創造者がおられますか」の92～101頁を御覧ください。「日」を「24時間」とみなしているファンダメンタリストなどちがって、「ものみの塔聖書冊子協会」は「日」をひとつの「期間」すくなくとも「数千年」以上のひとつの「期間」とみなしているのです。その理由も明示されています。

次に、もうひとつの「隣接領域」は「超自然」そのものです。

自然科学の定義からも明らかなおと、超自然(平たくいえば、「霊界」)は、直接的には自然科学の研究の対象には成り得ないでしょう。(京都大学総合人間学部教授 カール・ベッカー博士の「臨死体験」に関する研究などのように、「霊界」の存在することを強く推定せしめるに足る高度の研究は、ぼつぼつ出はじめていますが……)

しかしながら、その存在が非常に強く推定せられる「宇宙のデザイナー」は、存在物ではなく、存在者であるはずですから、その定義からも明らかなおと「超自然」の領域の存在であります。それゆえ、自然を研究すると「超自然」領域を肯定せざるを得なくなる、ということだけは、明らかに言うことができます。

その先のことは、カトリック神学の世界的権威、九州大学名誉教授・稲垣良典博士の「天使学」(angelology)の研究に示されているような高度の研究領域であります。

ここには、先に御引用させて頂いた「あなたのことを気づかう創造主がおられますか」の別の頁を、出典を明示して、御引用させて頂き度いと思います。

『意味深いことに、聖書は、「天的な体と地的な体があります。しかし、天的な体の栄光は一つの種類であり、地的な体の栄光は別の種類です」と記しています。(コリント第一15:40、44)これは、天文学者が研究の対象とするような、宇宙の見えない物体について述べるものではありません。ここで述べる「天的な体」とは、理知があって霊の体を持つ者たちのことを指しています。『創造者以外のだれに霊の体があるのか』と思われるでしょうか。

目に見えない天の被造物——聖書の記録によると、最初に創造されたものは、目に見える世界ではありません。この古代の創造の記述は、創造の最初の段階は別の霊的存在者を誕生させるこ

とであった、と伝えています。それは、いわば最初に生み出された子で、「全創造物の初子」、また「神による創造の初めである者」でした。(コロサイ 1:15。啓示 3:14) こうして最初に創造されたのは、特異な存在者でした。

これは神が直接に生み出した唯一の創造物で、卓越した知恵を与えられました。実際、後の時代の文章家で、賢王として知られた人は、この、神の子を「優れた働き手」と呼び、そのみ子が後のすべての創造の業に用いられたことを示しています。(箴言 8:22、30。ヘブライ 1:1、2 もご覧ください。)この霊者については、1世紀の教師であったパウロも、「他のすべてのものは、天においても地においても、見えるものも見えないものも、……彼によって創造された」と書いています。——コロサイ 1:16。ヨハネ 1:1-3 と比較してください。

創造者がこのみ子によって天に存在させた、見えないものとは何でしょうか。天文学者は、幾十幾百億という星や見えないブラックホールについて語っていますが、聖書がここで述べているのは、霊の体を備えた、幾億という霊の被造物です。『どうしてそのような、目に見えない、理知ある創造物が造られたのか』と尋ねる方がおられることでしょう。

宇宙についての研究はその原因に関する幾つかの疑問に答えを与えてくれますが、聖書についての研究も、聖書の著書に関して重要な情報を得させてくれます。例えば、聖書はその方が「幸福な神」であり、その意図される事柄も行われる事柄も愛の反映であることを示しています。(テモテ第一 1:11。ヨハネ第一 4:8) ですから自然な結論として、神は、生きることを同じように謳歌できる、他の理知ある霊者たちとの交友を持とうとされたのだ、と判断できます。その各々には満足のゆく仕事が与えられ、それは互いの間で益になると共に、創造者の目的に資するものでもあったでしょう。

これら霊の被造物は神に従う面でロボットのようになるはずであったと暗示するものは何もありません。むしろ神は、彼らに理知と自由意志を授けました。聖書の記述は、神が被造物に、思考の自由、また行動の自由を活用するように促しておられることを示しています。それが宇宙の平和と調和にとって恒久的な脅威とはならないことを確信しておられるからです。パウロは、ヘブライ語聖書にある創造者ご自身の名を用いて、こう書いています。「さて、エホバは霊です。そしてエホバの霊のある所には自由があります」——コリント第二 3:17。』

(「あなたのことを気づかう創造者がおられますか」ものみの塔聖書冊子協会、刊、86～88頁)

もうひとつの「宿題」は「宇宙のデザイナー」の特質に関する議論、(ID理論は定義にもとづいて守備範囲を限定しており、「宇宙のデザイナー」の特質に関してはあえて言及することをすら避けておられるように見受けられます)(ID理論の「定義」からも、それはもっともなことであり、その上、“外敵”にさらされているので、なおさら慎重に、言及をすら避けざるを得ないのですが)であります。

それは、ID理論の周辺領域に立っているわれわれ(とくに、小生)にとっては、最大の課題であります。

それは、その実在が非常に強く推定せられる「宇宙のデザイナー」は「全知・全能・全善・無始・無終・無辺」(omniscient, omnipotent, and completely righteous and merciful Creator beyond the limitation of time and space)であると推定せられるのか、それともそうではないと推定せられるのか、という「宿題」です。

小生としての結論(非常に強力なる推定)は「本学の基本理念」(2006年、版)8～9頁のとお

りであります。(本学学術論文集、第68集、34～35頁にも同文にて収録)

すなわち、真の実在としての真の「宇宙のデザイナー」は「全知・全能・全善・無始・無終・無辺」であります。それはキリスト教神学における「神」の定義に合致するでありましょう。

しかしながら、仮象としての宇宙を支配している仮のデザイナーは、「霊的存在」ではあっても、必ずしも「全知・全能・全善」ではなく、むしろその反逆者(キリスト神学における「この世の君」としての「サタン」; 佛教学における「無明」A-vidya:)としての強大なる「霊的存在」であるのではなからうか、と想われるふしすらあります。

もとより、そのような「霊的存在」(無明; サタン)は、あくまでも仮の存在であって、究極の実在ではありません。すなわち、永続性の無い仮の存在であって実在ではありません。「本学学術論文集」第68集17頁において、小生は、次のように記述しました。

『のちに、修養団体「生長の家」を御開創の谷口雅春先生は、青年時代の哲学論文集「聖道へ」(大正12年、新光社、刊)において「救いは創造主から来るか」と題して、ショペンハウエル教授(Arthur Schopenhauer 1788-1860)の「意志と現識としての世界」(Die Welt als Wille und Vorstellung, 1819)等にも依拠しつつ、この悲惨と苦悶の満ちている世界(宇宙)の原動力は、佛教学の「無明縁起説」における「無明」(A-vidya:)であることを精緻なる理論により厳密に解明せられた。

のちに、この哲学的考察をさらにおしすすめて(いわば、アウフヘーベンAufhebenして)、それゆえにこそ「無明」は「非実在」であり(「暗」という「非実在」が「光」の前には、たちまち、存在しなくなるのと同様に)真の「実在」(全知・全能・全善)のみが「実在」であることに全人類が目ざめて、そのことを「言葉」にて宣言することにより、**現実にも「非実在」は全く力を失い「実在」(実相)が開顕せられて**、生物の殺し合いはたちまち無くなり、さらにすすんで高レベルの常楽・常浄の多彩なる、個性ゆたかなる理想世界(理想宇宙)が永遠に成就する旨を「生長の家」の『七つの光明宣言』として御発表(昭和5年、1930年)あそばされた。

そのとおりである。完全に真理である。

では、どうして、人類(「全宇宙の要め」)(全知・全能・全善なる真の実在としての真の創造主の究極の創造目的)(全知・全能・全善の「真の究極の創造主」すなわち「実相」が、その無限の愛をふりそそぐべき対象としての自由意思を具える個々に不滅の知的霊的存在の「要め」としての)(個々に不滅であり、自由意思を具え、霊的に無限に生長しつづける)は、今迄、なぜ、そのことに気付かなかったのであろうか。

別掲のとおり、それは「助走期間」であったのであろう。そのことに気付いた以上、基本的にもう「助走期間」は完了したのである。あとは、この真理を全人類(全宇宙光明化の「要め」)に伝達するのみである。

そのことこそが、キリスト神学が神話的表現を以て示してきたものであり、佛教の真意であり、「言霊」すなわち「言葉の宇宙的実現力」を説いてきた神道の真意でもあった。われわれは今、理想世界(理想宇宙)の実現〔すなわち、実相開顕〕のスタート・ラインに立っている。

この真理を、父・小牧実繁(戦前の京都帝国大学教授、戦後、国立・滋賀大学学長)をとおししてお教え下さった国立・金沢大学名誉教授・岡本信太郎博士の御高恩を想起しつつ、日本さらには全人類さらには光明さん然たる常浄・常楽の宇宙の実現のため謹記した。』

(小牧久時「日本と全人類の未来のために——谷口雅春先生の「生命の実相」を讃う」「国際地球

結論を申し上げますと、究極の存在としての本ものの「宇宙のデザイナー」(全知・全能・全善・無始・無終・無辺)に対して、与えられている自由意思を誤用してあえて反逆した「もとの天使長」(サタン)の“血統”(霊統)から、「究極の存在としての本ものの宇宙のデザイナー」の“血統”(霊統)への「もとがえし」(復帰)こそが、究極の道なのであり、今やその実行段階に入ったのであり、本ものの「宇宙のデザイナー」がもともと意図されたる「創造本然の世界」(本ものの「宇宙のデザイナー」の無限の愛がさんさんとふりそそがれるべき、自由意思を具える存在としての被造物としての人類(肉体と霊体の多重構造と推定せられる)が、親子の関係を、しっかりと自覚して、子女として、孝子としての幸せを満喫し、無限の多彩さを発揮すること；「全知・全能・全善・無始・無終・無辺」の「にすがた」にふさわしくなること；個々に霊的に「無限の生長」をつづけること)の「実現」(開顕)の時は、今や目前なのです。

ID理論の研究者が「自制」して、あえて言及することを御遠慮しておられる、「創造本然の世界」の実現(復帰)についての「発表」こそが、最も大せつな次回の学際シンポジウムに向けての「宿題」でありましょう。

それらのことの詳論は、次回の学際シンポジウムにゆずります。

本日は、「ID理論をめぐる学際シンポジウム」に御参加たまわりまして、誠に有難うございました。(2006年1月15日)

附記——「国際地球環境大学の基本理念」の改訂に当り、将来詳細に記する予定であるが、簡潔にひとつの緊急の御提言を申し上げておき度いと想う。ID理論(全天全地全霊の究極の根源としての「全知・全能・全善・無始・無終・無辺」なる「宇宙のデザイナー」の存在とその個々の分霊の個々の不滅と「無限の生長」を推論する理論)と直接には無関係であるが、教育の根本に関することであるので謹記する。

「教育に関する勅語」の御奉読(小学校、中学校、旧制高等学校、旧制度の国公立大学において厳格に実践されてきた)がおこなわれなくなって久しいが、その復活を緊急に御提言申し上げる次第である。日本国民のみならず全人類が遵守すべき道徳が正しく示され

ている。全人類は全天宙(全次元の全宇宙)の要めであるから、その実践により、全人類はもとよりのこと、全次元の全宇宙の全存在(もちろん、多重なる霊的世界の全てをふくめての)の完全救済の時が必ずや促進せられることを確信申し上げる次第である。われわれは、「一旦緩急あれば義勇公に報ずる」の覚悟を堅持せねばならない。同時に、われわれは「戦争の無い世界」(世界各国の軍備全廃)(ノーベル物理学賞受賞に輝く、湯川秀樹博士御夫妻、小森義峰名誉教授ご提唱の「世界連邦」の実現)を目ざさねばならない。さらにすすんで「絶対平和への四段階」全目標の早期実現をめざさねばならない。(平成17年10月23日)

国際地球環境大学名誉総長

農学博士 小 牧 久 時 謹記